

# 浄土

十二月号

昭和十年五月廿三日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受承認誌) 第三五二号  
昭和四十二年十一月二十五日 印 昭和四十二年十二月一日 発行

第三十三卷

第十二号



法然上人鑽仰会

わがためにこそ

みほとけはおわす

円空・護法善神像

江南市音楽寺蔵



仏像はわたくしとつねに一对一である。だれのためにも  
仏像がそこにあるのではない。わたくしひとりのためにこ  
そ、そこにおられるのである。たとい、そこが金色のお堂  
であろうと、路傍の小さな木の下であろうとも、わたくし  
ひとりをそのみ仏は凝視し、見守り続けておられる。い  
や、そうではない。金色仏の像も、路傍の石仏もみなわた  
くしひとりのみを凝視し続けておられるのである。たと  
い、そのことに気づこうとも気づくまいとも、やはり、ほ  
とけの眼はわたくしに注がれている。円空仏は最近、急激  
なブームによって大衆のまえに脚光を浴びるようになり、  
また忘れられようとしている。だが、円空仏はそのような  
表面的ブームと関係なく、やはり、わたくしを見続けてお  
られる。香煙にくすんだ円空仏は、このような過去の入わ  
たくしに支えられて拌まれ、年輪をかさねてきた。うち  
捨てられてあった木の切れはしまでも、仏の息吹きがよみ  
がえり、形式や手法にこだわらない力強さがわたくしに訴  
える力となって現われている。

終えるにあたって、長い間、愚にもつかぬつぶやきをお  
読みいただいたことに感謝し、仏のいのちのありかたを今  
後も問い続けるつもりである。

(石上善応)

— 目 次 —

表紙「かも」松濤達文画

新しい法然上人の御遺蹟

..... 三田全信…(2)

アメリカの印象—その2—

..... 峰島旭雄…(5)

成道会に寄せて 幼稚園の成道会

..... 三枝樹亮成…(8)

御歌をいただく .....(11)

四苦八苦③ 疾病と無量心(病)

..... 渋谷賢応…(12)

「布教コンサルタント」提唱 .....(14)

お茶をおいしく⑫ お茶を常備薬として

..... 三浦純亭…(16)

今年を送る.....(18)

和訳三部経⑨ 凡夫たるを自覚する

..... 村瀬秀雄…(20)

歴史夜話⑧ 大将の資格

..... 玉山成元…(24)

浄土宗のおしえ⑩ 極楽浄土について

..... 金子真補…(26)

連続  
総語 みんなの法然さま・その弟子達

..... 高橋良和…(30)

雪のうちに仏の御名を唱れば  
つもれるつみぞやがてきえぬる

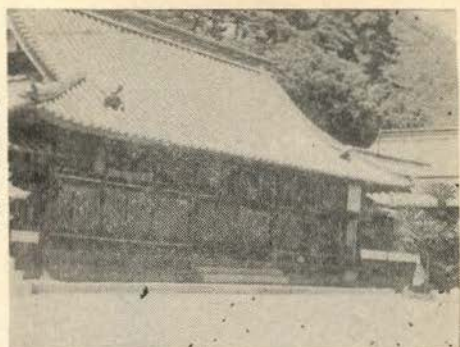
法然上人御歌



# 新しい法然上人の御遺蹟

瀬戸田の法然寺と光明三昧院

三田全信



【光明三昧院】

夢のような 美しい瀬戸内海  
の緑の島に朱の国室の三重の塔が見える。この島を昔は生口島といい現今では瀬戸田島と呼ばれている。

この島に法然上人の「御遺蹟廿五霊場」や「四十八霊場」及び最近の「元祖法然上人靈蹟巡拝の葉」にも漏れた御遺蹟がある。筆者が此の美しい島を訪れたのは七月下旬であった。瀬戸田島の船着場の近くに法然上人の御遺蹟法然寺がある。

法然寺 は寺伝によると法然上人が四国へ御流罪中に、この島の田の浦の真言宗光明三昧院におられた後白河法皇の皇女如念尼（好子内親王か）のお招きによって、上人は此の島へ渡られ説法をされることになった。上人は今の法然寺の地に

暫く逗留されて光明三昧院へ趣かれたようである。その時の庄司が深く上人に帰依して念仏道場を建立した。上人は感激されて所持の本尊を寄進し、百幅の名号を書いたり、浄土三部経など書写されたという。その後幾多の変遷があつて、今は本尊と御名号一幅だけを拝見することが出来た。江戸時代に入つて熊谷入道所持の大師像を迎えて現今に至つていといわれている。

光明三昧院 は光明房ともいわれ法然寺とは一山を隔てた反対側にある。筆者は別府信空住職が斡旋してくれられた檀家の息子の運転する車に乗せて貰つて、海辺の町道を約四十分山裾を迂回して光明三昧院に着いた。冬ならば瀬戸内海の暖かそうな海を前に控えた保養地にうってつけな処である。後の山は山向うの法然寺側へ突抜けられるトンネルが目下開鑿されつつある。嘗て山越の道もあったというから法然上人

は奥に乗って此の山を越して光明房の如念尼公を訪れられたのであらう。光明三昧院の略縁起によって歴史を綴ると、昔当山の本尊から光明が輝き靈驗頗る約かであることを時の住職が何かのついでに後白河法皇に申上げた。法皇は叡感あらせられ光明三昧院なる勅額を賜わり、保元二年(一一五七)天下泰平の御祈願所として生口島の莊園を御寄進遊ばされた。後法皇の皇女如念尼(伊勢斎宮好子内親王か)はお体のお弱い方であられたのか瀬戸内海の温暖な美しい景色に恵まれたこの地へ移り靈驗灼な如来に仕え給うたのであらう。

**京都** では法然上人の専修念仏の教が弘まり、京田舎さながら湯のようになつた最中、上人の門弟の住蓮・安樂の二人が鹿ヶ谷で六時礼讃の別時念仏を行ったのが京中の人気となり、後鳥羽上皇が熊野へ御参詣中に宮女松虫・鈴虫(俗称)の二女が、こっそり抜け出てこのお念仏に参加した。二人はあまりの有難さに、われを忘れて住蓮・安樂に乞うて頭おろしをして尼になった。これが上皇の叡聞に達し、使用人を無断で出家せしめるとは、不屈きな僧と逆鱗遊ばされた。これも全く御もつともなことである。ところがかねがね念仏の隆盛を妬んでいた南都の荒法師がこれを聞いて、どうも法然上人及びその門弟達はけしからん。住蓮・安樂は死罪にし、そして法然房を流罪にせよ、さもなくば春日の神輿を都へ乱入さ

せると朝廷へ訴え出た。朝廷では三不如意といって賀茂川の水、サイの目、山法師と仰ったほど大変お嫌いになり又お怖れになつていた。荒法師の乱入と聞いて震え上るほどびっくりなされて、ついに住蓮・安樂は死罪・法然上人は流罪にせよとの宣旨を下されたのである。気毒なのは住蓮・安樂である。しかし彼等は法然門下最初の殉教者として、礼讃を唱え念仏の声高らかに従容として首刎ねられた。見物の人人は目を覆い口を結んで哀れな気高いこの殉教者に一しお同情の涙を注いだ。

**七十の老軀** を携えて遠路四国を向われた法然上人は流罪を恨むどころか予ねての望である遠国教化が出来るのは頗る朝恩であると喜ばれている。逆境を悲み恨む人はあつても逆境を喜びとする法然上人の偉大な人格がうかがえる。上人は老齡故に最早都へは再び帰らぬと決心し、血を以て教に殉じた住蓮・安樂の悲しい思出を老の胸に秘め、門弟達がしばらく念仏教化を中止してはと諫めたが、上人は毅然として仮令死刑になろうとも念仏は止めぬと決意を示された。宗教は血を見れば見るほど盛んになるという。こうした事件で住蓮・安樂の血が信火となつて燃え上つた。

**宮女松虫と鈴虫** とはも早御所へは帰らなかった。宮廷の煩わしさ人と人との見にくい権勢の争から脱れた二人は瀬戸



松 虫 鈴 虫 の 墓

内海の麗わしい縁の島に居られる如念尼公をたづねて尼御前に仕ええる喜びを見出した。そして彼女等は尼御前に法然上人の教の有難さを物語り、尼御前も是非上人の説法を聴きたいと思召すようになって迎の使者をお出しになった。上人は高貴の方の御望みとあって無下に辞退することも出来ず、遂に生口島に向われたのである。

女人 というものはその当時天台や真言の祖師達にも障多しと嫌れ、救われる道さえ説かれていなかった。その女性が阿弥陀仏の本願に縋って念仏申せば救われると上人が説法されたのであるから、女性の喜びはただ事ではなかった。現今のように男女同権などとは夢にも考えられない。高貴の方は別として人格など無視された社会機構であったから、法然上人が女性救済の願である女人往生の願という言葉さえ他宗から批難があるといけないというので転女成男の願

(女が往生すると男に生れかわる願)と改められたほどである。この点男女平等を唱えられた法然上人は実に時代の偉大な先覚であったといわねばならない。

五輪の古塔 が四基あるが、その中二基は法然上人と如念尼公、他の二基は松虫・鈴虫の墓石といわれている。都での問題が大きくなって二女は都にも居られずこの寂かな縁の島に閑居されている如念尼公を訪れたということは決して不自然な事ではない。そして法然上人自作という木像や上人から受けたと伝える仏舎利などあり、尼公は毛髪などを遺して一蓮托生の思をなしたことも又あわである。この木像は慶長十七年九月十三日京都黒谷金戒光明寺が焼失した時徳川家康公の命によって此の寺から取り寄せられ、その代りとして当地の池田という人が泉州堺の仏師藤原源大夫が作った同体の法然上人像を安置したが、池田某がその靈験を怪んで胸に刃をあてたところ忽ち血が流れ出たというので「流血の木像」と呼んだと寺伝にある。

此の島 には今西日光と呼んでいる耕三寺が縁の山の峽にその麓をならべて盛んに観光客を集めている。この床しい歴史の物語を秘めた寺寺とは全く対蹠的な存在であろう。婦は水中翼船もあると聞いたが乗り遅れてしまった。往復には矢張尾道が便利である。

# アメリカの印象 —その2—

—キリスト教系大学での経験を通して—



## 雄 旭 島 峰

### 復活とハロウィーン

復活祭（本年は三月二十六日の日曜日）の前日、前号で触れたニュートン助教授がまたわたしをさそってくれた。グリーンキャスルでは、この日、町中の教会の牧師たちがファースト・クリスチャン・チャーチにあつまり、合同で礼拝をおこなうとのこと、それにこうというのである。日本でいえば、ちょうど地区仏教会連合で花まつりをおこなうといったところであろうか。当日その教会への道すがらわたしをビック・アップにきてくれたとき、ニュートン夫人が殻をさまざまな色にぬったゆで卵をもってきてくれた。復活祭にはこれを子供たちにプレゼントするのがならわしであり、子供たちは色とりどりの卵でしばらく遊んだのちこれを食べるのだということである。しかし、とニュートン助教授は附言した。このようなならわしはキリスト教そのものとはなんら関係がない、それはちょうどクリスマス・ツリーをかざるクリスマス・イヴのもよおしや、ハロウィーンに子供たちにキャンディをやるならわしがキリスト教そのものとはなんら関係がないとおなじであ

る、と。わたしは、仏教にもそのような例が多いことをかれに話した。ちなみに、ハロウィーン（万聖節）とは十月三〇日におこなわれるものであつて、夕方暗くなつてから近所の子供たちがハロウィーンの鬼の面をかぶつてやつてきて、戸を叩き、「トリック・オア・トリート」（なにかくれないとイタズラをするぞ）とさけぶのである。この日は、この家でもアメやクッキーを用意しておいて、イタズラをされるまねにくれてやるのがならわしになっているのである。

さて、合同礼拝の会場であるファースト・クリスチャン・チャーチには、定刻の午後七時にはぞくぞくと人びとがためかけてきた。デポー大学の教授たちの顔もみえるし、となりのUショップ（ユニヴァーシティショップの略、学生相手の雑貨店）のおばさんもきている。各牧師が式次第のどこかを担当している、お祈りの言葉をとなえるのはエビスコバール・チャーチの若い牧師、この日の特別講演者シカゴ・トリビューンの編集長を紹介する役はゴビン・チャーチのジョーンズ牧師、式進行全体をつかさどるのが会場教会のウェップ

牧師（この人は半年間、福島県平市の教会で宣教活動をおこない、アメリカへ帰って日本の事情を紹介するさい、夫人に和服を着せ、その帯の締め方が分からないので、わたしどものところへやってきたことがある）といった具合である。

礼拝がとどこおりなく終わったあと、ニュートン夫妻はわたしにバプティズム（洗礼）の水槽を見せてくれた。それは会堂の内陣にあり、重い石の蓋をよけると、古い木造りの浴槽まがいのものが現われる。ここではないまもなおトータル・イマーション（全身洗礼）で、ぬるま湯が用いられるとのことである。

話しはとぶが、この四月、アメリカが生んだもっとも偉大な哲学者の一人ジョン・デューイの跡を求めて、ヴァモント州のバーリントンへ行ったとき、デューイがわかいころ通った教会にも、「このおなじ洗礼の水槽があった。しかし、いまはじっさいには用いられないとのことであった。現在は頭の上に水を少々ふりかける方式が一般のようである。

ところで、ここにはなはだ皮肉なことがある。復活祭をはさんで四月はじけまで十日は

ど大学は休みになる。三月に入ってグリーン

キャスルはときに肌寒い日もあったが、すでにボカボカとあたたかい日々がつづいた。だが、これは例外であって、シカゴをはじめこの近辺はまだまだ冬の名残りをとどめていた。そこで、学生たちは復活祭の休みを利用して、南国常夏のフロリダへ、マイアミへといっせいにしかけるのである。いま「いっせいに」といったが、かれらはいち早く近郊諸大学の学生と連絡しあい、チャーター機に分乗して、休みの開始とともに、たちまち姿を消してしまうのである。とりわけデポー大学の学生は弁護士・医者・会社々長・大学教授などアメリカのいわゆる高級所得層の家庭のものが多く、デポー大学の学生二千四百名のうち五百名はフロリダへ行ったとか、この休暇のあいだにかれらは一人あたり一千ドルや一千五百ドルの金はおとしてくるだろうなどという噂が耳に入るほどである。つまり、イースター・サンデー（復活祭の日曜日）にはグリーンキャスルには学生はほとんどおらず、その大半はフロリダかどこかの日のあたる場所で、キリストの復活を祝ったという次

第である。

## 聖木曜日

前号でも書いたように、デポー大学哲学宗教科のアイゲンブロー特助教授はエビスコバル・チャーチの副牧師をしているのであるが、聖木曜日（Mundy Thursday）にはぜひこの教会へくるようにとさそってくれた。聖木曜日（Mundy Thursday 本年は三月二三日）とは洗足木曜日ともいい、キリストが最後の晩さんに使徒たちの足を洗ったことにもとづいている。たとえばヨハネ法第十三章に「イエスは……夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた」とあり、また「主であり、また教師であるわたしは、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである」と述べられている。

哲学宗教科の主任教授コンプトン博士（この先生については他の機会にもっと詳しく書きたいとおもっている）の説明によれば、キリスト教諸派のうちでもブレズレンなどきわ



(復活祭まえの儀式)

めて倫理的に厳格な派では、この日、教会へ参集した信者たちが向かいあつてならび、おたがいに相手の足を洗うのだそうである。これは人間平等の思想、人びとはたがいに愛しあわなければならないことをあらわすものであるという。大学教授がたまたま向かいあった人足のおかみさんの足を洗うということも出てくるのである（このような言い方自体がすでに差別観を前提しているともいえるが）。

シヴィル・ライツ・ムンヴメント（黒人の公民権獲得運動）に肯定的な関心をよせ、アメリカのヴェトナム戦争介入にはつきり反対の態度をとるコンプトン博士が、このような洗足の儀式に賛意を表するものも、もつともなにといいなければならぬ。しかし、コンプトン博士はそうかといつて決していわゆるラジカルな思想の持主ではなく、人間のクリエイティヴィティ創造力を信ずる温厚な紳士であることを、つけ加えておく必要がある。

わたしはアイゲンブロート助教授を通じて、フラッシュを用いないなら写真をとつてよいという許可をまえもつて取つておいたのだ、キャノネットをぶらさげて出かけた。途中で哲学宗教科のビートルック助教授といっしょになった。かれはイタリアやベルギーの大学を出、それにハワイのイースト・ウエスト・センターにもいたことがある、独・仏語に堪能な、サルトル、ハイデガーなどの実存主義からメルロー・ポンフィの現象学にいたるまでこなせる有能な哲学者であり、現在、デポー大学のもつとも有望な部門であるインターナショナル・スタディの部長をも兼ねて

いる。かれがエビスコバルだということはうすうすきいていたが、やはりそうだったのである。教会のなかで、わたしの仏教の授業に出ているマッコネル嬢ほか二、三名のデポー大学の学生に出会つた。彼女らは毎日曜日この教会へきているそうで、わたしにもたびたびきてくれといつた。

エビスコバルで感じたことは、儀式的のあいだに聖書からの章句を他の教会に比べてかなり多くよみあげることである。学生アルバイトとおぼしき助手が聖書を台ごと捧げもつあいだに、アイゲンブロート牧師がそれほど節もつけずに読誦していくのである。この日の正巻はなんといつてもボーム（ベーム）しか、であるが、ボームときこえる）の授与とそれを持つての堂々めぐりであつた。エルサレムからの直送だというボームを一人々々授かつたのち、十字架を先頭に、一同ボームをもつて教会を出、外がわを半周して別のドアから入り、中央祭壇にボームをささげて席へもどるのである。聖さん式で儀式が終わりをつけることは型通りであつた。

—成道会に寄せて—

## 幼稚園の成道会

三 枝 樹 亮 成



幼稚園の位置は住宅街のなかにあって、寺とは離れています。外見上仏教とかなり合いもないように思われるので、仏教的な保育の盛込みを、室内の設備・行事・保育に活かすことに苦心をしています。

私は祖父・父・私と三代続いて僧侶ですが、寺はそれぞれ縁があって、あちこち違っています。私の代は寺とは申訳だけで、実情は名古屋までのこのこ出て来て、昭和十四年幼稚園をはじめ、幼稚園に専心しています。だからこそ申訳ないと思い仏教保育にウエイトをおいた幼稚園に苦心しています。

幼稚園を手がけたいきさつは、幼時小僧に預けられた寺

が、大正年代創設の乳幼児の托児所を経営していたからです。紡績工場の女工・日雇人夫の乳幼児の保育をしていたのを見て、寺院として意義のある事業だ、宗教家として今後はこの新しい方向に進むべきだと思いました。一人前となった相弟子のうちでも幼稚園・保育園の園長となったのが数人できたのも、感化の影響の大きさといえましょう。

考えますのに、幼児のうちに宗教的なものを与えることは必要なことで、幼児の記憶は成長の後々まで性格・行動のなかに影響をしますから、幼児の仏教保育によって、心豊かな明るい人間を育てたいと思います。幼児の保育は宗教的でないければならない、これが青少年非行の問題をも解決すると思います。幼稚園の保育実習を大学から頼まれますが、幼稚園の仏教行事ねはん会を見た学生が、家に帰り母に告げると、

幼いときはお前をお寺へ連れてお参りに行ったものだ、お寺の保育園でもそんなこともあったよと教えられ、その時のことを思い出したと述懐して実習日誌に記録しているのを見て、教育はあとを残し、表面上記憶から消え去ったように見えるが、意識深く潜在しているものだと教育の重要さを感じました。幼稚園の行事は幼児だけでなく、若い学生の宗教的再教育にもなりました。

幼稚園の年中行事のなかで四月降誕会、十二月成道会、二月ねはん会を特に大事な行事としています。しかしこの三つのうちで、降誕会は入園、進級当初で落着かないし、二月ねはん会はあまり幼児向きではないが、十二月は二期の終りになり、保育も落着いてでき効果を挙げた総ざらえという事にもなるので、十二月八日成道会を丁重に行い、そのなかで幼児劇「お釈迦さまと悪魔」を上演することになっています。また月末の二期総ざらえの発表会を「こども音楽会」と呼んで行いますが、保護者参観のなかでもう一度この幼児劇をします。

お釈迦さまの伝記のなかで、幼児に形として理解させ易いのが、この降魔成道のあたりだと思っています。



お釈迦さまが川で水浴をして、休んでいると、村の乙女が

通りがかり、修業者の姿のただ様でない尊さを感じて、持っていた乳を供養し、元気になって修業して下さいとお願いをする。お釈迦さまは乳の供養をうけて、元気を取り戻し、菩提樹下の金剛座で修業を続けられる。これを見た悪魔の大王はお釈迦さまが修業のすえ成道されるのは自分達にとって都合だと、多くの悪魔を呼び集め、弓矢・槍をもって、修業を妨げようと襲いかかるが、身辺近くはどうしても近付けない。次には悪魔の女(眠りの精)をさしむけるが、やはり動ぜられないので根負けして退散する。やがて明けの明星の輝く八日のあけがた、おさとりをひらかれる。幼児の劇のこととて、劇の終りには悪魔も改心し、教えをうけ、共に喜びながら、出場者全員がタンブリン、カスターネットを打って、楽しくリズム合奏をするという形の大団円で幕。



十二月八日は園児一同が仏前に一同がお参りをして、園長のはなしを聞きます。園長は大型の絵ばなし「お釈迦さまの一代」(十二枚一組)のうち三部に分け、出生から青年時までを四月降誕会に、出城から成道までを十二月成道会に、初転法輪からねはんまでを二月ねはん会にと話します。成道会の歌を唱ってから、アトラクションとして、この劇をします。見物はこの時は園児だけです。十二月下旬の学期の発

表会には保護者が集って来て、吾が子の出来は如何と固唾を呑んで見るようになります。

この時は他の幼稚園ではクリスマスということになりません。クリスマスについては平日のうちに社会の事象として説明に止め、サンタクロース・となかい・ツリーの出て来ない発表会ですから、いわゆるクリスマスではありません。

幼稚園ではクリスマスは致しません。劇の乳供養に関連して、平素給食を納めている牛乳屋さんに話して、牛乳を相当量仏前にお供えしてもらい、全員がお下りをいただきます。

事のついでにパン屋さんはビスケットを供養して、幼児は乳と一しょにいただきます。

乳屋はお釈迦さまが乳の供養をうけて修業された故事を知らないで、始めはキョトンとしていたが、年々となると意味が解つたらしいです。成道会は乳屋さんとかかり合ひのある日だと、もっと解らせるとよいと思います。成道会が乳業会社の協賛で社会的行事になるとよいと思います。

成道会は牛乳を、降誕会は甘茶、ねはん会はだんごがしきたりになっています。これも楽しみの一つになっています。行事と食物の関係は他にもよくある例で、印象に残る要素です。このほか当日にお土産に成道会の絵本を施本として配布します。現在の家庭ではよく意義を知らないと思うので、こ

れがきっかけで親が読み、母と子の話題となればと思います。絵本は形としてあとに残るもので、これも省けないと思います。

成道会を幼児劇にするととなると、先ず十月には先生一同が組んで、童話劇をみせます。本年は「サルとカニ」をみせました。劇というものを解らせ、十一月になると紙芝居の「お釈迦さま」で、興味をもちながら、劇の筋の雰囲気をしみこませ、配役にかかります。主役のお釈迦さま、村の娘、悪魔、女の悪魔も決定します。男の子は先の光った槍をもつ悪魔になることを志願するものが多く、主役は敬遠されますが、それでも一応行儀のよい優等児が選ばれます。お釈迦さまがそそかしかったり、乱暴者では子供たちにとってもイメージがこわれますから。



何れにしても、当日以前に紙芝居で、或いは先生の話で成道会を知って居り、当日は園長の絵ばなし、そして幼児劇となりますが、繰返しを喜び、飽きないのは幼児の特性で、殊に幼児たちの劇は見る側も筋はとくに知りつくしながら関心深く見ます。

(名古屋市 清正幼稚園の成道会より)

## お歌をいたたく

雪のうちに仏の御名を唱れば

つもれるつみぞやがてきえぬる

(勅修御伝第三十四)

「雪のうちに」は六字で字余りの句ですが、これは歌の趣に重厚さを与えるものであるといわれています。また雪の下句の「つもれる」と「きえぬる」に対応しています。ここに「仏の御名を唱う」とは、十二月仏名会のことであって、三千仏の御名を唱えて罪障を懺悔する行事のことであるとされています。季節からすれば、たしかに仏名会のことを歌われたものと思われまします。

しかし仏さまといえは、阿弥陀さましか頭に浮ばぬものにとつては「仏の御名」といえばお念仏しか連想されません。このお歌が仏名会のことを歌われたにしても、わたくしたちはお念仏と解してもよいのでないでしょうか。さうすれば下句は、雪のようにうずたかく積った罪の上に、更に降りしきるように罪

を重ねてゆく姿が思われます。そこで御歌の意味は

外では雪が降り積っているが、心静かにお念仏を唱えていると、雪のように積った罪も雪が消えるように、直ちに跡かたもなし消え去ってゆくことである。

ということになります。

すべての罪は貪りと怒りと愚かさのもとになって生ずるものであります。しかしお念仏を唱えることによって、こうした煩惱の罪は除かれ、煩惱のない者と同じようになることができます。阿弥陀さまが放たれる光明には十二通りの性質があります。その中に清浄光歡喜光、智慧光の名がありますが、この三つについて、法然上人は次のように説かれています。

つまり清浄光というのは「至心に専ら阿弥陀仏の名号を念ずれば、即ち彼の仏、無貪清浄の光明を放ちて、照歡摂取し給ふが故に、姪貪、財貪の不浄を除き、無戒破戒の罪みだるを滅して、無貪善根の身となり、持戒清浄の人にひとしきなり」ということによりま

人と同じことになるのであります。

また歡喜光というのは「もし多瞋の人専ら念仏を修すれば、かの歡喜光を以てこれを摂取し給ふが故に、瞋恚の罪滅して忍辱の人に同じ」となるのであります。更にまた智慧光というのは「無智の念仏者なりといへども、かの智慧光を以て摂取し給ふが故に、よく愚痴の罪みだるを滅して、即ち智者と異なるあることなし」ということであります。

このようにいかなる凡夫であっても、お念仏を唱えれば、阿弥陀さまのおもちになって、いる力によって、賢人と異なることのないものとなることができ、従ってこれまでの罪が消えるのであります。

ここに「やがて」とありますが、その意味はそのまま直ちにといい意味であります。今ではやがてといえは、何れその内にといい意味に用いていますので、今様にこのお歌を讀むと、何れその内に罪障が消えてゆくというように解されることでしょう。「やがて」のものと意味は「即ち」ということです。お念仏を唱えれば直ちにといい意味で、力の籠ったお歌というべきであります。



四 苦 八 苦 — その四

疾病と無量心(病)

渋谷 賢 広

お釈迦さまのお弟子、シャリホツ尊者がまだ出家して仏弟子となる前に、ダーネン

と言う友達がありました。彼はシャリホツ尊者と共にお釈迦さまに帰依したのでした

が、途中仏道修行を怠って俗に還り、牛を飼って家業を立て、世渡り上手に悪事をは

たらき、なかなか儲けていたようです。

それを耳にしたシャリホツは、遊行の途次ダーネンの家に行き彼をたずねました。

彼は喜んでシャリホツを迎えました。

「よく来てくれたね。シャリホツ、久しくここに見えなかったのに。」

そうしてダーネンは金の手洗い器を持って来て手を洗わせ、大変なご馳走を出してシ

ヤリホツにすすめました。

「まあいい。およしなさい。ただ心が喜ばそれでいいじゃないか。」

「シャリホツよ。どうしてぼくの家に來て食を取ってくれないんだ。」

「君は仏道に精進していない。慾心のために世間に迷惑をかけていると言うが。」

「とんでもない。シャリホツ、ぼくは家業のために自分も今安隠であり、父母も養い、

家内むつまじく、使用人は優遇し、税金を出し、先祖を祭り、遊行の僧には施しをして

いるのだ。すべて法に従っているのだよ。」

「それならば君に問うから答えてくれ、父母のためだからと言って悪事をなしてもよい

と言えるかね。妻子がかわいいと言って悪事をなしてもよいと言えるかね。税を出すから

と言って悪事をなしてよいと言えるかね。僧に供養するからと言って悪事をなしても

かまわないとは言えないであろう。それで病み、死に臨み、君は安隠であると言える

のかね。」ここに至ってダーネンは合掌して尊者シャリホツに向い

「シャリホツよ、実はぼくに愛人がいたのだ。ぼくはその女に惚れたがために大に

に悪業を働いた。今日の財産はそのためにあるのだ。ぼくは今日よりきっぱりと女を

捨てて君のもとに帰依しよう。」

「いやそれはいけない。私の帰依する大師釈尊に帰依したまえ。」

このようにして善男子となったダーネン

に病魔が襲つたのです。それを聞いたシャリホツ尊者はただちにダーネンの家をおとずれます。ダーネンはシャリホツを見て床よりたとうとします。シャリホツ尊者は彼を止めて

「ダーネン、たつたらいけません。ここに空いた床があるからそれへ坐らせてもらいましょう。ダーネン、病氣はどうですか。食べものは少しは食べられますか。」

「シャリホツよお聞さ下さい。食べものは少しも進みません。病状は日に日につります。大男が刀で頭を刺すように頭痛がします。大男が縄で頭をくくり両方から引っ張るようです。牛の子の腹を裂いて殺すときのようです。大男が罪人を火あぶりにするときのようです。体中が痛く、その苦しみは増すばかりです。私のみどうしてこんな苦しみを受けるのでしょうか。」

「ダーネン、心を落ち着けてよくお聞きなさい。たといどんな苦痛にあうとも心は常に広く、自分のみ病むと思わず、他人を恨まずうらやまず、他人の喜びを喜びとし

我欲を捨て去るよう心がけなければなりません。我が師釈尊は身はいかにさいなまれても四つの無量の心を忘れてはいけないとさとされました。限りなく人をいつくしみ、他人と共に悲しみを分かち、他人と喜びをともにし、我慾を捨て去ることなのです。そうすれば心は安らぎ、命終つて後梵天に生ずることができるのです。」

こう言い終つて立ち去ると間もなく、ダーネンは安らかに命終つて梵天に生ずることができたのでした。(中阿含經卷六梵志陀然經) 病の、とくにかたくなな我れ独り病むと言うみじめな心に、廣大無量の心底をさすけたシャリホツ尊者の叡智には目を見るばかりです。

人は、その行いの善悪にかかわらず病むときには病まなければなりません。ただそれはいかと受けとめるかと言うことにかかっています。病は、どのようにしてもその人個人のものです。どんなに愛情が深くて、病人の痛みをそのままに分かち合うことはできません。それなるが故に、病人は自分独りを病

み、いよいよ孤立し、ますます偏狭となり、肉体の苦しみをともなつて身をせめるのです。ダーネンも、病苦と宿業の呵責にさいなまれ続けたのでした。良友シャリホツは彼のために四無量心を説きました。慈と悲と喜と捨とです。それによって心は開け、安隱の往生をとげることができたのです。

ダーネンはしかし梵志です。僧形をとまなわずとも仏弟子です。法も知り行も積んでいます。さてわれわれ凡夫はその期に及んで果してダーネンの如く安隱の往生がとげられるでしょうか。

ただひたすら四無量の心を心とし、慈悲喜捨を怠らず、口に名号をおとなえするよりほか道はないようです。

このぎりぎりの関頭に立つとき、浄土の門の広大さを改めて感得せずにはおられません。



## 「布教コンサルタント」提唱

現在の出版界の潮流は「人生論」であるといわれる。人生論といえ、中年以上の

人にとってはすぐに、トルストイの「人生論」倉田百三の「出家とその弟子」三木清の「人生論ノート」などが思い出されるであらう。そして、若き、良き時代、これらの書物に感激をこめて傾倒したことが、つい昨日のようによみがえってくるであらう。そして、ゲーテの

「涙とともにパンをたべたものでなければ人生の味はわからない」

などという箴言には、幾重にも、赤丸をつけて、ひとり感懐に耽けつたものである。

それが近來、再度、新しい形でよみがえってきたようである。時代もかわり、人もかわって、亀井勝一郎、堀秀彦、古谷綱

武などという人々が若い世代の共鳴をさかんにしている。

こうして、時を経て、遠い潮のうねりのように、くりかえし、くりかえし若い人々によって、「いかに生きるべきか」という問いが投げかけられているのである。この問いは、いかに文明が進歩し、社会が複雑化し、組織が巨大になろうとも、人間がそれぞれ、自らのいのちをもつて、生きていくかぎり、絶えず間なく問われつづけるのである。

むしろ、こうした問いの発せられるかぎり、そこには人間があくまでも真実の人間たらんとする意欲に燃えていることを知って、限らない歓びを感じるのである。

人間の生き方を問う人生論への要望は一転して、信仰の世界においてもみられるので

ある。いや、そうではない。「人生論と信仰」というように切りはなされたものではない。人生論の中には当然信仰論がふくまれているのである。あるいは逆に、人生論の根底には信仰論がなければならぬのである。人間の真実の生き方を問うことは、とりもなおさず、人間の真実の信じ方を問うことにほかならない。なぜなら、真実に生きることは真実に信ずることだからである。

このようにして、人間の生き方が問われるということとは、信仰が問われていることなのである。人生論がブームであることは別の形で信仰論ブームなのである。それならば、そのブームに応じて、信仰書が多く読まれているだろうか。なるほど、仏教





書や宗教書に類するものは、たしかに沢山出版されている。そのかぎりでは、信仰論ブームといえるかも知れない。親鸞の歎異抄、道元の正法眼蔵、日蓮の書簡集など、どここの本屋の店頭にもならべられている。

ところが、まことに残念なことに、法然上人のものは余り読まれておらぬ。というよりは法然上人に関する書物は学問的以外のものはまことに寥々たるものしかない。わずかに増谷文雄、田村円澄両氏のもののほかは、数江氏の「念仏のえらび」が目立つ程度である。

いまここで、その理由をさぐってみたり、法然門徒の怠慢をあげつらうてみたりすることは無益である。それよりわれわれがいたいことは、書物を通しての信仰論より、もっと直接的な、もっと効果的な信

仰論を大いにひろめることである。

元来、信仰というものは、理論でもなければ、論理でもない。それは、なまなましい生活体験である。紙に書かれた文字をとおしてではなしに、人間と人間、心と心、魂と魂とが、じかに触れ合つてこそ語られ、伝えられるものなのである。文書にあらわされた、それはむしろ結果的なものであり、二義的なものなのである。——ここに「布教」ということが信仰の世界においては、なににもまして大切なものとされるのである。

こんなことは、いまさらいわぬでものことかもしれない。しかし、現在、若い世代で人生の意味がしきりに求められている時点で、このことは改めて考えられねばならぬことである。

キリスト教にはすでに古くから「伝道学」がある。在家主義をふりかざす新宗教の諸教団では教団組織自体がすでに布教態勢を根幹として形成されている。そうしたなかにおいて、旧態の安逸がゆるさるべし。

本誌が「浄土」という名称をもち、法然上人讃仰の名において刊行されていることを、いまこそきびしく反省しなければならぬ。いうなれば、本誌のとほしい頁のすべてをささげても、まだ足りぬくらい、現下に、念仏布教は急務とされている。

こうした反省をふまえて、われわれは、本誌有縁の方々の衆知を動員して、本誌に「布教コンサルタント」の開設を企劃したい。

その細目についてはいづれ諸士の意見を得て発表することとするが、要は、現下のこうした信仰流出の好機を、手を拱いて見すすことのないように、どうしたらよいかということと呼と対手と方法と、あらゆる条件に即応し得る態勢をととのえることである。

そしてこのことをなしとげることが、教化を中軸とするといわれる本宗をして本宗たらしめる道なのである。(編集部記)

# お茶をおいしく

—その12—

## お茶を常備薬として

黄 檗 幽 茗 流 家 元

三 浦 純 亭



〈売茶翁〉 岡田章雄作

日本では茶道と申せば抹茶に限られているようですが中国では、宋、元時代に盛んに行なわれました。抹茶が明時代には全く影をひそめ、現在では尋ねても知る人は無くなったと申します。現中国では工夫茶として煎茶のみ隆盛を極めているとききます。

隠元禪師渡来前の日本の抹茶は特権階級だけのものではあったのに対して、均しく戴く煎茶の民衆性は緑茶、番茶共に、全国の家庭に浸透する役目を果たしたのは、今より二百年前の中興の祖売茶翁であります。

抹茶道は利久を茶祖としますが煎茶道は高遊外売茶翁を茶祖としてあげております。

利久さんは草庵を生みだし又自分の上下で違えた入口を、にじり口一本にして上下の差別なく身を低しさせ、無一物中無尽蔵の心をおしえ、売茶翁は自然を友とし屋外にて千客万来一碗の茶に禅心をしめました。どうぞ、朝な夕、召上ります煎茶に売茶翁の徳をも、身近にお感じいただき、今日の煎茶道なるものを御理解下さいますように……………。

売茶翁は

肥前の国(現在の佐賀県)

蓮池の人で出家する前は

柴山元昭と申しましたが

十一歳の頃出家して

名を「天昭月海」と改め

黄檗独湛禪師の法第

竜津化霖に師事し

師と共に黄檗山に訪たり

諸国を遍歴し

再び竜津寺に戻り

寺務を見て居りましたが

師、入寂された後

寺務を法第大潮に

譲り「自分如き者が

布施で世を送ると云ふ

ことは、まことにいかがましい事である

と、

還俗し、「高遊外」と

名を改め

茶を担ひ

京洛の景色の良い場所

で

茶筵を開き

茶銭を入れる竹筒に

「随所に茶店を開く

一鐘は一銭生涯唯だ

筒の裏に有り」

「黄金百鎰より半分銭

に至るまで呉れ次第

ただ飲むも勝手

ただよりは負け申さず」と

唱え、清風露月を友として

大悟徹底、僧俗間を往来し、

茶の真髄を伝へた人で有り

当時世の人達は翁を仰して

「売茶翁」と呼んだと

云はれております

又自分もそれを

号しました

煎茶の興隆は

売茶翁の力に俟つ

ところ頗る多く

煎茶家は

売茶翁を茶祖と仰いでおります

宝暦十三年七月十六日

八十九歳の高齢で

三十三間堂の南岡崎の里

幻々庵で静かに入寂なさいました

お茶を常備薬として

昔から「武人と陣中茶」の話はよく聞か

れますことで、要するに茶が「精神統一」「熟

慮断行」「沈着果断」の精神力練成上、大

きな役割を持って来たことは枚挙に遑がござ

いせんが、茶が精神面ばかりでなしに、野菜

不足の壞血病(ビタミンCの欠乏)予病にも

いかに保険的効果があるが、日露戦争の時、

旅順に籠城していたロシア軍は、青物不足か

ら二万人以上の壞血病患者を出し、遂に落城

するに至った。と云う話をきかされた事も有

り、又豊太閤が朝鮮征伐の折、蔚山城の加藤

清正は籠城の覚悟もかたく城中に茶の樹を植

え野菜不足を来たす事を防いだと云う、ま

とに知恵ある話もございます。地震国日本、

不可抗力の災難の備えにも、加藤清正ならず

とも、日本茶を常備薬の一つとしてお心掛下

さいませ。

茶 断 ち

其の昔中国の明時代にダツタンの大王さま

が、アルタンカンに蒙古、西海、京北あたり

を荒れ廻りまして、明朝を覆そうとしました

が、明朝から「だん茶」の供給を断わられま

したので、さすがの大王さまも懷血病にか

り苦しみ、とうとう「だん茶」をもらう事を

約束に休戦し、平和になったお話、又最近の

週刊紙にイギリスのコペントリー市のトラク

ター製造会社の経営者が、就業する前の一杯

の茶を、このほど四千人の従業員に対して、

厳禁したことから、労使完全に対立、空前の

「お茶スト」に発展したと云う話。会社側の

言い分には仕事前のお茶は非能率的だとい

う、組合側では「朝のお茶の一ぱいがどのく

らい労働力を豊かにし、チームワークに役立

つかが、どうして判からないのか、時間的に

拘束するだけで能率が上がるとでも思ってい

るのだろうか」と反論している……と。

前者は茶をたたれたことに依って平和をも

たらし、後者は茶をたたる事に依つてストライキを起す。緑茶、紅茶も味こそ違ふが同じ茶の樹であり、茶は精神的にも、保陰的にも世界、必須の飲料であり、茶の道こそ人間生活の心のよりどころであるとも云へる又、お茶づきであった私の亡き母など吾が子等の病や不幸を救くう為に「茶だち」までして神仏に請つた尊い氣持、お茶をのまないと言ふ事はいかに苦しい事であつたかと、勿体なく弱かった。私が今日元氣でお茶の道に精進出来るのも尊い母の恩愛の賜と今更年感謝して

いる。

これは過ぎし年三十五年八月号、日本煎茶道連盟発行の煎茶道誌に掲載しました隨筆でございませう、全く茶を断つと云ふ事は苦しい事で、若い頃は弱くて死を宣告された私に母が茶断し青山の善光寺様にお百度を踏んで全快を祈つて下され、三七、二十一日の満願の日に持ち直しました私でございませう、まことに勿体なく有難いことでした。最後の稿にこのような自分ごとで睡おきぎくるしい事と存じますが、年を明けます一月十二日は母の十

三年でございませうので供養のために一寸したためさせていただきます何卒おゆし下さいませ、三浦家は浄土宗でございませうのも何かの御縁でございませう。日常いただきませう煎茶が私のつたない筆で少しでもおいしくお味いただけましたでございませうか、又茶の功德を見直していただけましたならばこれに勝るよろこばはございませう。長いこと御清読をいただきましてまことに有難うございませう厚く厚く御礼申上ります。

合掌



## 今年を送る



平和のシンボルである羊年に間もなく別れて、新たに申年を迎える日も近い。今年には、思い出せない程いろいろな事があつたが、それでも、特に印象に残る様な大事のなかつた点からすれば、寧ろ平和な年であつたのかも知れない。羊年らしい年であつたと言えよう。それに引きかえ来年は申年

である。申年は猿年とされている。動物の中では、知恵の発達した方と言っても、猿は猿である。カッとしたら、何をし出すか分らない。(つい此の間も、ヴェトナムから来た猿が、三人程に檻から逃げ出して、怪我させた。猿年である来年が、無事平和である事を願つて止まない。

平和と言っても、世界は何処かで火花を散らしている。現にヴェトナムでは、道理に叶わぬ殺し合いが、已然として続いている。最近では、殺傷される数が、南北共に増しつつある。悲惨そのものである。特にそうした戦火の中で泣き叫ぶ民衆の音が、耳元でする様で、とても堪えられない。同

じく仏教を奉ずる国の人々が、大国の争での犠牲となっている事は、何としても悲しい現実である。来年とは言わぬ。明日にでも、こんな戦争は止めて欲しいものである。

イスラエルとアラブとの争いも、今年における世界的危機の一つであった。これも大國間の谷間にある小國の悲しい現実ではあるが、特にそれが、キリストの聖地をめぐる争奪戦であるところに、われわれ宗教人として割り切れぬものがある。宗教とは平和を愛するものである筈である。その宗教の問題が、こうした悲劇となる事に堪えられぬものを感じずにいられない。未だに彼の地では危機をはらんでいるが、これも早く平和へのきざしが欲しい。

国内でもいろいろの問題がある。しかしこの頃のように人命が軽視される事は、一体どうした事であろうか。交通による死者の数の増加もさる事ながら、目を覆いたくなる様な殺人が、三面記事を賑わすとは、何という事か。こうしたところに、戦後の教育の大きな欠陥を見い出さずにはいられない。

い。それは、宗教情操の教育を教育から締め出したという事である。アメリカ政策に乗せられた人はいうが、本場のアメリカでは、ちゃんとキリスト教を中心とした情操教育をしているのである。それを、敗戦国とは言え、日本に宗教教育の無い教育を課するのは、何事かと言いたい。憲法を平和憲法というが、宗教を締め出した様な憲法は、一刻も早く改めねばならぬのではあるまいか。

然し同じ宗教でも創価学会の様に、自分だけが正しい宗教で、他は一切邪教というのものが又困る。今年は、彼等は衆議院に二十名もの議員を送って、権力を背景として、宗教制覇にと乗り出して来た。来年の参議院選挙でも更に進出を企て、折伏々と叫んでいる。こんな宗教をのさばらしては、とても国内の平和など望むべくもあるまい。

今や、世界は宇宙時代になり、月はおろか金星までも行けそうな時代になってきた。宇宙競走では、アメリカもソ連も始めて犠牲者を出し、一時は自重したが、この頃は又盛んに競走を始めた。人類の平和の為でなく、自

己の制覇欲をみたす為の宇宙競走などは、止めて欲しいものである。

いよいよ来年は、又オリンピックの年である。高原の地メキシコで、若人の平和の祭典が行われる事になっている。しかし、これも今年の日本におけるユニバシヤード大会の様に、純粋な学生の平和な競技の筈が、政治の舞台となって、共産国不参加のままで開催されてしまった。来年のオリンピックが、又そうした形で行われる様なことにでもなれば、若早や、何処にも平和の顔は見い出し得ない事になる。是非とも、オリンピック位は、世界人類の平和の祭典としたいものである。

いずれにしても、われわれは平和を、本當の平和を願うや切なるものがある。釈尊や法然上人の教へに直参したいものである。「仇を打てば、必ず仇を打ち返される。もうこれで止めて、わが菩提をとぶらって欲しい」法然上人の父君のこの願いこそ、われわれの切なる願いとすべきではあるまいか。(Y)



### を たる 夫 凡 る 覚 自 雄 秀 瀬 村

#### 五 仏身は虚空に満つ

釈尊は阿難尊者と羣提希（いだいけ）夫人に向つて説いた。

「次には觀世音菩薩のお姿を心の中で見るのである。そもそも觀世音菩薩の身長は十六兆千の八十万億倍という大ききであつて、この大きなお身体はすべて紫金色に輝いている。

また頭の頂きが一段と高くなつていて、頭の後にある円光は、その大きさが百六十千の百

千倍もある。この円光の中には五百の仏たちがまじりまし、更に一つ一つの仏たちは五百の菩薩たちを侍者としている。頭には寶石の天冠をかぶり、天冠の中に仏がをられるが、その仏の身長は四千千にも及んでいる。

觀世音菩薩は全身から光明を放ち、この光明によつて地獄、餓鬼、畜生、人、天等のすべての世界にいる者たちの様子をうつし出している。この光明の中でも七宝色に輝く眉間の白毫から放たれる光明は、八万四千の種類があるが、その一つ一つの光明に無量無數百千の仏がいて、更に一つ一つの仏たちは無數の菩薩を侍者としている。これらの仏や菩薩

たちは自分の姿を自由自由に変えて現われ、十方世界にみちみちている。

觀世音菩薩は瓔珞<sup>1</sup>を身につけているが、それらは紅蓮華のような色をもつ五百億の光明を放っている。また手掌は五百億の蓮華でいろどられ、十本の指の一つ一つに八万四千の印があつて、一つ一つの印に八万四千の色があり、一つ一つの色に八万四千の光りがある。この光りは柔軟で、一切を照らしている。人々はこうしたお手によつて導かれているのである。

1 瓔珞は、珠玉の飾りで印度の貴人が頭、頸、胸などにかけた。

觀世音菩薩が足をあげると五百億の光明台が現われ、足を下げると摩尼の花が咲き、いたる所に花がみちあふれる。この觀想を觀音觀といい、第十觀という。觀世音菩薩の名を聞くだけでも無量の福が得られるのであるから、この觀想をなすものはすべての禍いを避けることができ、無量劫にわたる生死の罪を除くことができる。

次には大勢至菩薩のお姿を心の中で見るの

である。大勢至菩薩の身長や円光や光明等は

すべて観世音菩薩と同じである。ただしこの菩薩の光明は智慧の光りであって、人々をして悪道から離れさせる力をもっている。また王冠の中には五百の宝華があつて、一つ一つの宝華に五百の宝台があり、これらの宝台はその中に十方諸仏の国土を映し出している。

大勢至菩薩が歩くと十方の世界は一時に震動し、そこに五百億の宝華が生れる。菩薩が坐ると七宝の国土が一時に動揺し、無量寿仏の分身と観世音大勢至両菩薩の分身が雲の如く無数に極樂浄土に集り、それぞれ妙法を説いて人々を救う。この観想を勢至観といい、第十一観という。この観をなすものは無量劫にわたる生死の罪が除かれる。

次には自分自身が西方極樂浄土に往生した姿を心の中で見る。これは自分自身が極樂の蓮華の中に坐して、その蓮華が開いたり閉じたりすることを想うのである。蓮華が開く時には五百色の光りが自分を照すと想い、仏菩薩が空中にみちみちていることを想う。すると水、鳥、樹その他すべてが妙法を説いていることを知るであらう。この観想を普観

といい、第十二観という。

もし真実の心をもって西方極樂浄土に往生したいと願うならば、その者はまず宝池の上に五米ほどの無量寿仏の像が置かれていることを心の中で見なくてはならない。無量寿仏の身長は、さきに説いた通り限りなく大きいのであるが、凡夫の力をもってしては無限に大きい仏身を観ることがとうていできない。しかし無量寿仏はすでに宿世の大誓願力を成就されているのであるから、もし人が小さな仏像に観念をこらすことができたとなれば、この観法も必ずや成就されるものである。

阿弥陀仏は神通自在の力をもっておられ、自由<sup>1</sup>に身を変えて十方世界に現われる。従つてある時には虚空に満てるような大身となつて現われるが、またある時には五、六米という小身となつても現われる。このように阿弥陀仏のお身体の大きさは違ふが、どのような場合でも、お身体は常に真金色をなしている。観世音菩薩と大勢至菩薩との身長は、いつでも同じ大きさであつて、両菩薩を区別するには頭の相をみてそれと知らなくてはならない。この二菩薩はいつも阿弥陀仏を助け、

一切のものを教化している。この観想を雜想観といい、第十三観という」

## 六 三心具足すれば往生す

続いて釈尊は阿耨尊者と韋提希夫人に向つて、極樂往生する者には上中下の三品の区別があり、各品に上中下の三生の違いがあつて結局九種類に分けられることを説いた。

「上品上生の者<sup>2</sup>というのは、極樂浄土に往生したいと願つて、三種の心をおこし、それによつて極樂浄土に往生する者のことである。ここに三種の心<sup>3</sup>というのは、一には至誠心<sup>1</sup>、二には深信<sup>2</sup>、三には廻向發願心<sup>3</sup>のことである。こうした三心<sup>4</sup>を具えている者があれば、その者は必ず極樂浄土に往生することができるのである。

### 1 法然二人は至誠心を説明し

「一に至誠心（しじようしん）といふは、真実の心也。善導釈しての給はく、至といふは真の義、誠といふは実の義、真実の心の中にこの三界六道（欲界、色界、無色界、天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の九つの世界で、善と惡とのすべての世界のこと）

の自他の依正三報（宿業によって受けるすべての報いのことで、苦悩の多い世界にいる自分と他人とすべての物のこと）をいって、三業（身口意の三業のこと）で生活することの身体のこと）に修するところの行業にかならず真実をもちいよ、外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮をいだくものは、日夜十二時につとめおこなふ事、かうべの火をはらうがごとくにするとも、往生をえずと也。ただ内外明闇をえらばず、真実をもちゆるゆへに至誠心となづく」（要義問答）

といわれ、更に具体的に説明して  
「一には外相はたうとげにて、内心は貴からぬ人あり。二には外相も内心も共に貴からぬ人あり。三には外相はたうとけもなくて内心はたうとき人あり。四には内外共に貴き人あり。この四人が中に、さきの二人はいまきらふところの至誠心かけた人なり。これを虚仮の人となすべし。のちの二人は至誠心具したる人なり。これを真実の行者となづくべし」（劫修御伝第二十二）  
といわれている。

## 2

法然上人は深心を説明して

「二に深心（じんしん）といふは、ふかき信也。決定してふかく信ぜよ。自身は現にこれ罪悪生死の凡夫也。曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出雨の縁あることなしと。また決定してふかく信ぜよ。かの阿弥陀仏、四十八願をもて衆生を摂取し給ふ。うたがひなくうらおもいなければかの願力に乗じてさだめて往生すと」（要義問答）

といわれ、善導大師が深心を二つに分けて第一にわが身の風夫であること、第二に阿弥陀仏の願力のこととを深く信ずるのであるとされたのは何故であるか。このことについて法然上人は説明して

「この釈（親経疏）の心は、はじめにはわが身のほどを信じ、後には仏の願を信ずるなり。その故は、もしはじめの信心をあげずして後の信心を釈し給はば、もろもろの往生をねがはん人、たとひ本願の名号をばとなふとも、みづから心に貪欲瞋恚の煩惱をもおこし、身に十惡破戒等の罪惡をもつくりたる事あらば、みだりに身をかるしめ

て、身のほどをかへりみて本願を疑ひ候はまし」（勸修御伝第二十二）

といわれた。深く信ぜよといっても、どの位にまで深く信ずるのかということについて法然上人は

「おふぎねがはくは仏のことばをばふかく信ぜよ。もし一切の智者百千万人きたりて、経論の証をひきて、一切の凡夫念仏して往生する事をえずといわんに、一念の疑退の心をおこすべからず。ただこたへていふべし。なんちがいくところの経論を信ぜざるにあらず。なんちの信ずるところの経論はなんちの有縁の教なり。今いく所の経論は菩薩人等に通じてとけり。この親経等の三部は、濁惡不善の凡夫のためにとき給ふ」（要義問答）  
といわれている。

## 3

法然上人は廻向発願心を説明して

「廻向発願心（えこうはつがんじん）といふは、一切の善根をことごとくみな廻向して往生極楽のためとす。決定真実の心のうち廻向してむまるるおもひをなす也」（要義問答）

といわれ、簡略には

「かれにもこれにも、ことなる事に廻向することなくして、一向極樂に往生せんと廻向すべきなり」(勸修御伝第二十二)ともいわれている。

4 三心は別々な心が三つ集まっているというのでなく、一応は三つに区別しても実は一つ心になるのであると、法然上人は

「南無阿弥陀仏といふは、別したる事には思ふべからず。阿弥陀ほとけ我をたすけ給へといふことばと心得て、心には阿弥陀ほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿弥陀仏と唱ふるを、三心具足の名号と申なり」(勸修御伝第二十二)

といわれ、また

「ただし三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり」(一枚起談文)

といわれ、更に

「人目をかざらずして、往生の業を相続すれば、自然に三心は具足する也」(諸人勸化のお詞)

といわれた。

また極樂に往生することのできる者に三種

類の人がある。その内の第一には、慈悲の心が深く、殺生等をしないばかりでなく、その他の戒も保っている人のことである。次に第

二には大乘の經典を誦誦する人のことである。また第三には、六念を修行し、それによ

る善根を廻向して、極樂浄土に往生したいと願ひ、こうした功德の法を一日又は七日にわたって修行する人のことである。これらの人

は何れも必ず極樂浄土に往生できる。これらの人が命終つて極樂に生れるときにあたつては、阿弥陀仏が大光明を放つて行者の身を照

し、多くの菩薩たちとともに、行者のために手をそえて蓮台に迎え給う。觀世音、大勢至

兩菩薩は他の菩薩たちとともに行者を讃めたえ、行者の心をはげまされる。そこで行者は阿弥陀仏とその他の菩薩たちを目の前に見

て、歡喜し、踊躍し、自ら自分の身をみるとすでに金剛の蓮華台についで、仏の後に随っていることを知る。そして彈指の間に、かの極樂浄土に往生することができ。これを上品上生という。

1 六念は念仏、念法、念僧、念戒、念施、

念天のこと。

2 彈指は指を弾くことで、瞬間的な短い時間のことをいう。

上品中生の者というのは、必ずしも大乘經典を受持したり、誦誦したりしないけれども諸法皆空の理を聞いて少くも疑わう心がなく深く因乘の法を信じて、大乘の教えを誹謗しないばかりでなく、このような功德を廻向して、極樂浄土に往生したいと願う人のことである。かゝる人は命が終ろうとする時にあつて、阿弥陀仏の來迎をうける。阿弥陀仏は觀世音、大勢至二菩薩をはじめ多くの菩薩たちに囲まれながら、紫金色に輝く蓮台を捧げて、その人の前に現われる。行者は自分自身を振りかえつてみると、すでに蓮華台に坐していることを知る。

そこでその人が合掌して諸仏を讃歎するとたちまちにして極樂浄土の七宝他の中に往生する。この紫金台は、大宝華と同じである。行者の身は紫金色であつて、仏の光明に照らされている。これを上品中生という。



## 大將の資格

玉山成元

去る十月二十日午前十一時五十分、吉田茂元首相は大磯の私邸で八十九歳の生涯をとした。生前は何かと悪口をいわれた人であるが敗戦後の沈みきった日本人に、勇氣と自信を言えつけ、著しい復興を遂行する原動力になった点は高く評価しなければならぬ。現代政治の貧困さに比較し、誰しもその偉大さを再評価したに相違ない。

政治家の偉さとは別に、私の最も感心した記事は、人様からいただいたものは、どんなものでも粗末にしないことと、どんなささいなことにもお礼をいわれたという、礼儀正しい行動であった。吉田さんといえば白タビ袴にステッキを思い出すが、そしていかも貴族趣味の頑固さを夢想させるが、それはあくまでも公的な場合の姿であった。大磯でくつろぐ吉田さんは、使用人の果まで氣を使い、一日何度も「ありがとう」を連発。バラがよく咲いたといっは自分のネクタイをあげたり、金をやったりした。子供の訪問の場合はどうしたら喜んでもらえるかとチョコレートやお菓子をさがすという涙ぐましい努力を

した。全くの好々爺であった。世にいう吉田学校の生徒はいうに及ばず、他の多くの人々に対する態度も容易に推察される。

文治元年（一一八五）二月、源義経は讃岐の屋島に平家を攻めたが、家人の佐藤藤信が敵の矢に中って戦死した。義経は悲嘆はなはだしく、一人の僧を招いて千本松に葬り、秘蔵の名馬をこの僧に与えた。この馬は名を大夫黒といい、もと後白河法皇の御厩の馬で、義経が法皇の行幸に供奉したときに法皇から与えられ、戦場に向うごとにこれに騎ったものであった。この義経の戦士を愛する行為は美談としてもてはやされた。

足利尊氏は部下に領地を沢山やったので天下を取ったといわれているほどである。彼は上下の区別なく、惜しむことなく物と人を見合わせるということなく、手当たり次第に与えたという。八朝などには諸人の進物が数知らずあったが、皆くれてやるので夕方には何もなく終わったという。

けちゃんほうといわれる家康だつて関ヶ原のときには思い切つて行賞している。景氣のよ

い秀吉が家康の上をいったことはいうまでもない。大將たるものは部下に褒美をくれてやるということがその仕事のうちの重要な一つであった。さらに恩恵ばかりではなく、愛をもって接することが必要であったのである。

義経が佐藤藤信の死を弔った一事は部下の心をとるという気持がそこにあったかもしれないけれども、それよりも義経が心から部下を愛したことのあらわれであるとみた方がより適当であろう。それが大將の有力な資格の一つであったことには違いない。

秀吉は朝鮮征伐の時に、出征の兵士が病気で苦しんでいるのを知って奈良中の医者を徵発して朝鮮に送っている。毛利輝元が朝鮮で病気になる<sup>と</sup>彼は当時日本第一の名医といわれた直曲瀨玄圃を朝鮮にまでやった。それらも決して秀吉の策略ではなかったはずであろう。秀吉が天下を取りえたところは愛が大きい働いていたと思われる。それは彼の生れつきであったに相違ない。尊氏だって恐らくは秀吉と同じものをもっていたに相違ないし家康だって同様ではなかったかと思う。父のた

めに死ぬとか、兄弟のために死ぬとか、朋友のために死ぬとか、死にはいろいろな場合がある。それらは孝行であるとか、友情であるとか、そんな形で説かれているけれども、その根底に働いているものは愛であるはずである。どんな素朴な社会においても愛は強く働いたはずである。大將が部下を愛するということは、江戸時代の武士道学者の武士道の徳目の中には入っていない。けれどもこのことは武士道の中のどんな徳目よりも尊いことであり重要なことである。

国葬当日の十月三十一日朝、吉田さんとの交際深かった料亭山口のオカミ白井くにさんが涙ながらに追想した話は、その人柄をよく現わしたものであった。オカミが病気が臥していることを聞いた吉田さんは、多忙な政治の合間をぬって見舞にかけつけ、医師会長の武見博士を派遣して生かしてくれと頼んだという。秀吉の一件をまねたわけではなからうが、誰にもできることではない。吉田さんは芸能方面にも趣味が深かった。オペラの大師所藤原義江を世に出したのも彼であったし、

吾妻徳穂や花柳寿輔の舞踊を鑑賞し、細かな注意をしたのも彼であった。清元、長唄など、なんでもわかった吉田さんが極度に嫌ったのは浄瑠璃である。わからぬというなら話は別だが知り過ぎてきらったという。それは人情ものが多いだけに、悲しくて聞いていられなかったからという。しかもうまい太夫になればなるほど泣かせるため、名人山城少椽の勲章授与が遅れた裏話をきかされた。全く情にもろい人であった。新聞社のカメラマンに水をかけた情景からは考えられない一面である。

このような暖い涙もろい人間性が吉田学校を生み、難かしい戦後の社会を方向づける原動力となったのであろう。土佐の闘士竹内綱の血をひくといつてよい。

しかもそれは大將としての資格を備えたものであった。諸行無常とはいふものの、実に惜しい人であった。



# 浄土宗のおしえ <9>

## 極楽浄土について

金子真補



お経文に「三界唯一心」この世の事物は皆私共の心の現われである、とありますが、全く、その通りであります。

「浄土」といえば、み仏の色々あるように、その仏の住み給う国、「浄土」も色々あることとあります。

今、ここである「極楽浄土」は「阿弥陀仏」の住み給うお浄土のことである。

抑、その「極楽浄土」も本来は時代により各祖師方の見方によって色々と説かれているのでありますが、今は「浄土宗の極楽浄土」宗祖法然上人の拝まれた「極楽浄土」の一端について考えて見たいと思います。

法然上人は「極楽浄土」は「阿弥陀仏」が因位、また御修行時代、一切衆生救済の為に四十八通りの大願を立て、難行苦行の結果めでたく本願成就し「阿弥陀仏」となり給い、今現に西方十万億の仏土を過ぎた処に「極楽浄土」を構え我々衆生を救わせ給うていられると信仰され、その浄土へ人生のつとめを終えたその時は、是非に「往生」生れ往きたいものと念願されたと拝察します。それは宗祖大師のお言葉に

浄土門といは、この娑婆世界をいとひすてて、いそぎて極楽にむまるる也、かの国にむまるる事は阿弥陀仏のちかひにて人の善悪をえらばず、ただほとけのちがひをたのみたのまざるによる也（和語灯籠）

およそ、生死をいづる行一つにあらずといへども、まづ極楽に往生せんとねがへ、弥陀を念ぜよといふこと、釈尊一代の教にあまねくすすめ給へり（十二箇問答）

われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土にむまるとををしめさんがためなり（勸修第十回）

とあり、実に、宗祖大師は、「極楽浄土」に以上のように生れ往くことを主張なされました。

それでは、その「極楽浄土」とは、どんな処かといいますと、宗祖大師には「極楽浄土」について、所謂「議論」は余りないようであり、例えば、「浄土」について或人が問われた時に

問曰、極楽に九品の差別候事は、阿弥陀仏のかまえさせ給ふ事にて候やらん、答曰、極楽の九品は弥陀の本願にあらず、

四十八願の中にもなし、これは釈尊の巧言也、悪人善人一所にうまるといはば、悪業のあるものとも慢心を起すべきが故に九品の差別をあらせて、善人は上品にすすみ、悪人は下品にくだると説給える也、いそぎまいりて見るべし(十二問答)

とありますように、所謂極楽の説明議論をさけていられます、それはない、さけていないのではない、「浄土三部経」の中に、お釈迦様が詳しく説かれていますので、そのままに信仰され、その尊き「浄土」へ往生し成仏、仏になろうとされたのであり、又、已に善導大師によって論じ尽されているし、或は又、次の文のように「三昧発得」極楽を本当に親見した善導大師ですら極楽の境界は議論以上のこととされて居らるので、素直に「経釈」の意をとって宗祖は議論するより一心に念仏する「実践行」に進まれたと拝察するものであります

諸仏の境界を尋ねるにただ仏のみよく知りたまえり、国土の精華は凡の測るところに

あらず(法華指掌疏)

して凡夫の伺い知る処ではないとされ、或は又、

学生骨になりて念仏や失はんずらん(善導集 廿二)

とあり、学問だ、研究だとして瘦細り肝心のみ仏の信心にかなう念仏申すことをおろそかに、否、念仏をしなかったなら、何にもならぬとお考えなされたことである。

そこで、宗祖の「極楽浄土観」を強いて求めようとしますと、宗祖が、私の「安心決定」も「浄土開宗」も皆、「偏依善導一師」善導大師お一人によってした事であると仰せられて居りますから善導大師のそれで見ようと思ひます。

それは、宗祖がいくら尊い師につかれ、仏教の学問をしても、どうしても安心立命出来ず悩み悩んだ挙句、遂に

しかるあひだなげきなき経蔵にいり、かなしみかなしみ聖教にむかひて、てづからみづからひらきてみんに、善導和尚の観経の疏にいはいく「一心専念弥陀、名号、行住坐臥不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼願故」という文を見得て

後、われらがごときの無智の身は、ひとへにこの文をあふぎ、もはらこのことはりを

たのみて、念々不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなふべし、ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり、順彼願故の文ふかくたたらぬにそみ、心にとめたる也(和語灯錄)

即ち、私は、善導大師のみ教によって全く救われ「安心決定」「浄土宗」も開きましたと仰せられていますから。

なぜに、善導大師お一人によられるかといえ、宗祖はその著「選択集」にそのわけを説いて

善導和尚偏以「浄土」而為「宗」、而不以「聖道」為「宗」故偏依「善導一師」(選択集)

即ち、善導大師は数ある尊い祖師方の中でもお一人だけが「浄土」の教を専門に修行され又次に「念仏三昧発得者」、即ち単なる議論学者でなく、「三昧発得者」本當の証驗を得られた方であるからだとされている。

扱、それでは善導大師の「浄土観」は、といえ、所謂「指方立相」の浄土であります、それは、「三部経」に説かれてありますように

法藏菩薩（阿闍梨の修行時代の名）すでに成仏して滅度を取りたまうとやせん、いまだ成仏したまわすとやせん、今現に存すとやせん、仏、阿難に告げたまわく、法藏菩薩今すでに成仏して現に西方に在す、ここを去ること十萬億利なり、その仏の世界を名づけて安樂（極樂世界のこと）という（無量壽經卷上）

と、釈尊の説かれた「極樂浄土」をそのままに信じ給うたのであります。

今日の人のように、何でも疑って見て議論する、極樂が西にあるか、そんなことは考えられない、今日の天文学上許されないことだ、という、如何にも尤もなことである、併し、それなのに、善導大師、宗祖法然上人はどうして、経文のように信仰され念仏の修業を一途になされたのであらうか。

勿論、善導大師のお考えにも、もっと本質的な「極樂浄土観」はあります、それは、「法事讃卷下」に

極樂は無為涅槃界なり

とあり、その外にもよく善導大師は、極樂は「涅槃の世界」であることを示されている、

これは、大乘仏教の本来の立場で、「極樂世界」は勿論「さとり」の境界、東西もなく、生滅変化もない、「絶対の世界」、とされていることで、このお言葉は、宗祖大師も、「選集」に引かれていることでありますから、宗祖も極樂の「無為涅槃界」なることは考えられていたことを知る。

併し、そのことは充分承知の上で、善導大師は強いて「指方立相」とされ、極樂世界は「從是西方過十萬億仏土」の世界として信仰の対象とされたのであらうか、ということである、私は、ここにこそ「浄土宗」、善導、法然両大師の深い真なる思召があるので私浄土宗の者達は、よくよく知るべきであると思うのであります。

それは、善導大師の意によれば、

三身の化用みな浄土を立ててもって群生を導く法体は殊なることなし、有識これに帰して悟りを得、ただし凡夫の乱想寄託するに由なきがための故に、釈迦諸仏慈悲を捨てず、ただちに西方十萬億利を指さしむ国を極樂と名づけ、仏を弥陀と号す、現に在して説法したまう（法事讃卷上）

或は又

ただ方を指し相を立てて心を住して境を取らしむ、すべて無相離念を明さず、如来はるかに知りたまう、末代罪濁の凡夫は相を立てて心を住するすら、なお得ることあたわず、術通なき人の空に居して舎を立てんがごとし（觀經疏定善觀）

と仰せられ、それはどこまでも表面切つて「さとりて行こう」としても仲々さとなない、心を静かに澄すことすら出来ない凡夫である。この凡夫を一体どうするか、これが大悲のみ仏の御立場である。この立場に立たれた時、止むに止まれず、特に催された立場が「指方立相」目当方角を立て「先づここまで来れ」と、切な親心から、衆生誘引の手引きとして西方極樂とされたことで、仏の大慈悲心の発露である。さればこそ衆生としての私達凡夫は、只素直に信順してその思召に添い奉ることが最も大切な事となるわけであります。而も、極樂に行けば、極樂の土徳として自然にさとりへと導かれるとする。即ち

一たび弥陀の安養國に到りぬれば、畢竟道遙すなわち涅槃なり、涅槃の莊嚴処々に満

てり、色を見香を聞くに罪障除く（般舟讃）  
或は宗祖の言葉としては、

即身頓悟のむねをもあかさず、歴劫迂回の  
行をもとかず、娑婆のほかに極楽あり……  
わが身のほかに阿弥陀仏いますと説いて、  
この界をいとかのくにに生じて、無生忍  
をも得んと願すべきむねを明すなり（淨修説  
法）

極楽この土に縁ふかし、弥陀は有縁の教主  
なり、宿因ゆえ、本願ゆえ、ただ西方をね  
がわせたまうべきことをおぼえ候え（誓願問  
答）

とあって、思うに「指方立相」の立場が誤つ  
ているの、そんなこと宇宙時代の今日、どう  
も考えられない信じられないなどは決して  
いわれない、実は、浄土の祖師方は「極楽浄  
土」の「涅槃界」なることは百も二百も承知  
の上で、併し単なる議論の上でなく、本当に  
命をかけて苦修練行の結果体達された立場が  
実に「指方立相」の立場であつたので、ただ  
の学問議論で否定などすることは勿体なき極  
みであると思ひます。

次に「極楽浄土」は「涅槃界」なのに、な

ぜに、七宝莊嚴の真善美極めた浄土相なので  
あろうか

彼の弥陀極楽界を觀するに、廣大寛平にし  
て衆宝をもて成す（往生礼讃）  
或は又

一切の莊嚴皆な法を説く、心領納なくして  
自然に知る（往生礼讃）

このことについても少しく考えて見ますと、  
私達の住む娑婆世界のすべての事物が前述の  
お経文にあるように「三界唯一心」皆、私達  
の迷ひ穢れ易い心の所変でありますように、  
極楽世界のものは皆阿弥陀仏の心の現われで  
あり、その阿弥陀仏のみ心は無漏清浄の願心  
一切衆生を救済しようとする「大悲心」実に  
尊い心からであります。それ故に、私達の心  
の現われとするこの世のもののすただけ美  
しくも惜しく心引かれるものでありますから

極楽世界のものは廣大であり、端嚴微妙であ  
り説法利生もされるのは当然であり少しも不  
思議誤りはないものと思ひます。

もろもろの宝樹林、みな弥陀無漏心の中よ  
り流出す、仏心これ無漏なるによるが故に  
その樹もまたこれ無漏なり（觀經定善觀）

今、弥陀如来の国土を莊嚴したまいしも、  
衆生を引接しやすからんがためなり（三部經  
記）

極楽浄土の二報莊嚴のありようを委しく説  
きたまへるも、衆生の信心を勧めて欣求の  
心をおこさしめんがためなり（逆修説法）

実に、以上によって知られますように、宗  
祖の「極楽浄土觀」は念仏信仰の人々の生れ  
行くべき対象として、この世、この土でさと  
りのひらかれぬ者の為に切角、仏の施設し手  
引きして下された国と拝がまれたことであ  
り、その大悲の思召しに深く感激し少々の疑  
を抱くことなく、否、そんな信疑の沙汰を棄  
り越えて御本願をひたすら信じて念仏一行に  
励んで効われの境地に体達すべきを教えられ  
たことである。



そこで、私、浄土宗の者としては、よろし  
くこの信念に住し、しっかりと「西方極楽世  
界」を目当てとし喜心力強く念仏信仰に邁進す  
べき也と信じ行じて居る者であります。

（般舟讃）

|   |   |
|---|---|
| 絵 | 連 |
| 話 | 続 |

# みんなの法然さま

— その弟子たち —

高橋良和  
さしえ 加藤直



法然上人には多くの弟子があつたが、そのなかでも秀でていたのはやはり九州からきた聖光房弁長（しょうこうぼうべんちょう）であつた。

弁長はやはり法然上人が一ばん将来に期待をもつた弟子であつたから、京都で吉水庵室を訪ねて上人から念仏おしえを聞くと一入、ありがたくなつて、

よーし、この念仏のおしえを九州で弘めよう。

と決意したのである。

というのも、三十六才のとき、上人のところを訪ねて、むしろ上人のおしえに反対して自己の主張をたててやろうと思つたのに、豈はからんや、奥深き、他力易行の念仏の深い意味を聞いた上、

この選択集（せんちやくしゅう）はわたしが書いた念仏の

要旨をまとめたものであるから、そなたにあげよう。

といわれたのに心にうたれて、

吾が信ずる人は法然上人である。これぞお釈迦さまである。

ということ、念仏を弘めることをすっかり心に決めたのである。

こうしたことで、法然上人のおしえの真髄をうけつぐことに努力したが、その間六年間であつたということである。

このようにして聖光房は鎮西の地、すなわち熊本にかえて、四十八日間の別時念仏を行なつたとき、自分が法然上人からうけたおしえをまちがいなく、後世の人々につたえるために、末代念仏授手印という書物を書き残したのである。

これが法然上人のおしえをうけた弟子が書いた念仏の書物



の最初ともいうべきものであって、この聖光房の布教伝道が九州の一つの拠点となって、そこに生れたのが今の筑後の善導寺本山である。

この寺にあって、聖光房は、毎日六時のおつとめを行ない、一日に六万遍の念仏を修して、ますく尊き聖として鎮西に重きをなしたのであるが、嘉禎四年の二月二十九日、自分が書写した阿弥陀経を手にもって、念仏のうちに遂に眠るが如く往生したのである。

然し聖光房の布教伝道は九州に大きな礎石を残したのであって、その後この遠隔の地に浄土のおしえがのびてゆくのである。さて、ここでもっと付け加えなければならぬことは、法然上人のおしえが二つの流れになったことである。

それに上人の弟子であった勢観房源智が京都にあってつたえている法然上人のおしえと、聖光房のつたえている九州における法然上人のおしえのことである。

もしこれがそれ／＼異なったものであるとするなら、浄土の法門は分裂することとなるのであるが、事実にとそれと反対に、全く一本の流れとなつて残ることになったのも、浄土門にとつてはしあわせなことであるといえる。

それは、聖光房が亡くなり、勢観房もまたこの世を去つてからのことであつた。

聖光房の弟子に然阿弥陀仏（ねんあみだぶつ）というのがあり、勢観房の弟子の蓮寂房（れんじやくぼう）いうのが、わりわり相談をしたのである。

一度あつまつて、先師から聞いている浄土のおしえをお会いして話合いをしたい。

ということ、ある日、東山のさるところで会ったのである。

折角であるから、鎮西上人のおっしゃった念仏のおしえを聞かせていただきたい。

と蓮寂房からいうと、

浄土のおしえは、ただひたすらに仏を念じて、一日出来るだけ多く、それも声を出して念仏することである、と聞いている。特に謹しむべきは疑いの心であつて、一向に仏に眼をむけて、凡悩具足の凡夫のままで救われるおしえだと聞いている。

なるほど、全く然阿弥陀仏のおおせの通り。そうでございませうか、まちはいはいございませぬか。

ええ、これで結構でございます。それであなたがつたえられるおしえを、これから法然上人の弘められたおしえとして、広く日本中の人々につたえたいと思うか。

ありがたいしあわせてでございます。

この二人の間の話合いが、見事に一本にまとまったのである。いいかえれば京都で弘める念仏と、九州で弘める念仏が一本となったのである。これで浄土宗のおしえは今後絶対に横道にそれることなく、弘まることになるのである。

このようなことがあつて、今までつたえてきた浄土宗のおしえは聖光房のうけついでおしえにまちがいが無いということ、浄土宗のことを更に詳しくいう場合は、浄土宗鎮西派とも呼ぶようになったのである。

更にその次の世代に記主（きしゅ）が出て、いよいよ浄土のおしえを関東に弘めることになるが、法然上人には数々の弟子があつて、いたるところにこのおしえを弘めたので、その一派として西山派というのがあり、善恵房証空（ぜんねぼうしょうくう）上人の流れから西山派という宗旨を弘めることになるが、それとて、法然上人の流れを汲む宗派である。

かくして、日本の隅々までつたわる念仏のおしえは誰でも、どこでも、いつでも信ずることが出来るおしえであり、いたるところ念仏の声となつて、信者の固い集まりが出来たのは、如何に大衆のためのものであつたかがわかるのである。

鎌倉時代の宗教改革者法然上人は、あのキリスト教のルーターのような、否、それ以上の信仰革命を大衆にあたえた人といえるのである。

（おわり）

# 編集後記

▽元総理吉田茂氏の菩提寺は浄土宗横浜光明寺（白幡恵佑師）である。義父母吉田健三氏夫妻は久保山光明寺墓地に納骨されており、茂氏は総理現職中もよく菩提寺に参詣したものである。諸般の事情でカソリックで葬儀をしたが亡くなられた直後、菩提寺へ連絡があり、知恩院岸門主と曰輪住職が回向に往かれた。長男健一氏と親族は高感激された由。若き日より念仏によつて祖先を供養してきた吉川さんにしてみれば、何とて念仏をたむけられてこそ満足の事だろう。

▽浄土の読者の最中の顧問として一般在家の方がお見えしていることである。東京の貴金屬商の秋元氏は、熱心な会員の一人で、たえずボ

ケットに浄土誌を入れ、ことあるごとにPRをし浄土信仰をすすめておられる。浄土の会員一人が一人ずつ会員獲得されても大きな力である。ぜひ御力添えをお願いしたい。

▽松代地震で有名な信州松代の長明寺小布施弘学師は本山布教師であるが、長い道生活の体験と併せて地震で温泉の地たのを活用して業師会館を建設中、布教師で新機軸を生みだそうとフアイトをもやしている。

▽静岡教区（教区長魚尾尾久師）は、教区一丸となつて新しい動きを示している。以前より寺と檀信徒の連繫を密にするため、檀信徒協議会を結成して、実地に会を催してきたが、先頃は大自然的に総力を結集し、各方面の権威者を招いてコンサ

タントを開設、大変な反響をよんでいる。その催しに出講した竹中博士も、大いに感ずるところあり、本誌に連載していただくことになった。新企画に御期待ください。

▽知恩院、増上寺で行われた聖書道場の入行者も本年は大部若手が多いようであったが、一週間の加行を如法にうけた感動は格別らしく最後大僧正と両手を合せたときは、唯々涙溢れて念仏者の目覚がおのづと湧いてきたと、ある浄土会員はもうしていた。

▽現代には感激というものが薄れていくような気がする。「あたりまえ」と受けとり、「あたりまえ」と受けとることが出来にくくなっている。「あたりまえ」と受けとる人生をひらくために、浄土の使命もある。よきお年越しを。

## 「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

（送料 六円）

会費一カ年 金七二〇円

（送料 不要）

浄土 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年十一月二十五日 印刷

昭和四十二年十二月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二二五九四四番

郵便東京八二一八七番

宮 林 昭 彦 著

新 刊

# 極 楽 に 生 き る

定価 260円

〒 50円

現代の精神的な空白を救うためには、危機意識の自覚により、私達  
のかけがえのない命を精いっぱい生かすことにあります。本書はこの  
問題の解決に一つの答えを見出すため法然上人にみられるあたたかい  
人間愛を中心に通常の生活の中にその素材を求めたものです。

## 内 容

第一章 極楽に生きる・法然上人とその信仰

第二章 生活の道しるべ

発 行 所 大 道 社

東京都千代田区飯田橋1-11-6 振替東京8247

〓御 年 始 の ご 挨 拶 が わ り に 御 用 を〓

「修養ひめくり」

価 100円・送料45円用紙33枚  
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費 (見本は150円お送り下さい)

「浄土宝暦」

価 25円・送料 25円 40ページ

50部以上より単価20円 送料実費

発 行 所 法 然 上 人 讃 仰 会